Urban Design Lab. Magazine

2007.5.10

50 号記念特大号

都市デザイン(西村・北沢)研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻 東京大学
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

編集長　：坂内良明
編集委員：石井宏典　塩澤諒子　蛎灰谷愛　平岡惟　増田圭輔　矢原有理

研究室と共に歩んでマガジン50号

二年間休まず発行、ヒューマンな公式メディアめざして

2005年4月に創刊された本紙は、隔週で休みなく発行を続けて、今号で50号を迎えた。研究室活動の全体像を、迅速に、分かりやすく、且つ細やかに、研究室の内外へ発信していく、という理念は、どれだけ達成されているのか。創刊以来、本紙を見守り続けてきた両教授に、評価をお願いする（左頁）とともに、紙面からこの二年間　の研究室を振り返った（右頁）。

両教授が採点するマガジン「通信簿」

さらさらとマルを付けた西村教授の採点は、（学部講義「都市保全計画」と同じく？）甘め。しかし、「発行ペース」の「良」で「全優」を逃したことを、マガジン編集部としては重く受け止めねばならない。

北沢教授は、デザイナーらしく、紙面のレイアウトに「もう少しゆったりとした紙面構成を。字が多すぎる」と注文（※）。「三行記事」を基本とした初期の姿勢を今いちど思い起こす必要があろう。

西村幸夫教授
定期発行を、死守せよ。

北沢猛教授
ゆとりの中に、熱さを持て。

	西村幸夫教授	北沢猛教授
1．通常記事の内容	優	良
2．特集・企画記事の内容	優	優
3．分量	優	良※
4．外へ向けたわかりやすさ	優	良
5．面白さ	優	優
6．レイアウト	優	良※
7．発行ペース	良	優
8．編集部員の熱意	優	優
印象に残っている記事	・初期のハノイ訪問記事 ・タイ研究室旅行の特大号 ・ＯＧ永井さんの母子訪問記事	・ＯＢＯＧだより ・編集長のコメント
マガジンへの一言	この調子で発信して下さい。 毎号楽しみにしています。	「都市批評」のようなものが、短くてもいいので毎回あるとよいですね。熱く語って欲しいですね。

マガジンで振り返る都市デザイン研2005–2007

■全国・海外に広がるまちづくり活動

充実のプロジェクト群こそが、わが研究室の真骨頂。「現場に学べ」のモットーを携えて、従前よりあった「喜多方」「鞆の浦」「大野村」「京浜臨海部」に加えて、2005年には「八尾」が、2006年には「新宿」「都市空間の構想力」が、それぞれスタート。新領域・北沢研が2006年に発足して、「柏」も動き出した。「かけもち」が常態となるプロジェクト熱は、この二年間のうちに急速に進行したと言えよう。全国津々浦々で、都市デザイン研のまちづくりが試されていった。

2004年ハノイ、2006年バンコク、と行われた研究室旅行では、アジアの都市をじっくり歩きつつ、現地の大学とまちづくりの現状・技法等について親しく情報交換を行った。また2005年には、Ｍ１（当時）院生を中心としたメンバーが、イタリアで行われた2週間の国際ワークショップに参加。研究室活動の舞台は、国内に止まらぬ広がりを見せた。

2006.5 中島助手(当時)

2006.8 阿部D4(当時)

■2006年度は博士３名を輩出

2005年度のニラモン・現チュラロンコン大講師に続き、2006年には、中島直人助手の満を持しての都市美研究、３年のスペイン留学の成果をまとめた阿部大輔・現政策研究大学院助手、社会人生活と研究生活の二足のわらじをはいて論文を仕上げた坂本圭司ＯＢ、３名が博士号を取得した。後に続くのは誰か？

■ＯＢ・ＯＧの活躍

修了したＯＢ・ＯＧが、各界でまちづくりに携わってゆく、実り多き二年であった。研究室関係者の手によるまちづくり関連書籍の刊行点数も、多かった。マガジンでは、折にふれてＯＢ・ＯＧだよりでその活躍を取り上げるほか、結婚、出産などのプライベート情報もフォローしていった。

2005.12 大野村にＯＢ集う

2006.8 永井OGの愛児+野上OG

★★★★★★wedding rush!

本紙が報じた限りでも、８組の研究室メンバー、ＯＢ・ＯＧ、が結婚。 平均すると、3ヶ月に一組のハイペースだ。マガジンでは今後も細やかに情報を追っていくので、ご予定のある方は、秘匿なきよう！

2006.11 掃除

■研究室環境への批判と提案

まちをデザインする者が、自らの起居研鑽する場である研究室の環境に無関心であってはならない―。そうした信念に基づいた、さまざまな革新的提言がなされていった二年でもあった。大掃除、扇風機設置などの物理的問題にとどまらず、「席替え」がはらむ体制的な矛盾について疑義が提出されたり、夏休みの生活アンケートから、行き過ぎた「プロジェクト偏重」主義に警鐘が鳴らされたりもした。

ピクニック展開催
柏スタジオは前半の山場へ

text_kakibaya

５月4日(金)、柏の葉都市開発予定地にてピクニックエキスポが開催されました。GW真っ只中の当日は晴天にも恵まれ、巨大バッタ型風船やジャズコンサートといったメインイベントをはじめとして、大勢の人々が思い思いにピクニックを楽しんでいました。

いよいよ柏スタジオは5月26日に中間発表を控えています。受講生は、柏市長をはじめとする関係者の方々、地元の方々へ熱い考えを伝えるべく、それぞれの公共空間の設計に取り組んでいます。

留学生お宅訪問　第３回　D1 楊さん（台湾）

interview_hiraoka,yahara

日本に来て３年、先日は修士論文で不動産学会賞を獲るなど、異国でも充実した研究室ライフを送る楊恵亘Ｄ１。好調の秘訣を探るべく、M1編集部員が吉祥寺の閑静な住宅街を訪れた。

【一問一答】
●研究室にくるまで
　台北出身。学部時代は園芸学科でランドスケープを専攻。台湾では日本のドラマを見ていた。日本語は助詞が難しい。
●日本で好きな場所は？
　最近行った鎌倉の山が良かった。日本の伝統的な住宅が好き。ちなみに台湾では高層の集合住宅が一般的。
●ここが変だよ日本の街
　住宅が狭い、家賃やバス代が高い。台湾には礼金がない。
●日本のいいところは？
　ケーキがおいしいこと！
●研究室へのメッセージ（？）を。
　３年以内に卒業したい。
　30歳以前に結婚したい。

（訪問後、吉祥寺が初めての編集委員に井の頭公園や吉祥寺を案内してくださいました。）

東京を漕ぐ－陣内研・外濠ＷＳ－

M1 佐古奈々美（空間計画研）

５月12日、絶好のボート日和に開催された外濠ワークショップ（法政大・陣内研主催）。江戸城の外郭水路、また近年まで運輸の要であった外濠がテーマということで、９大学より総勢約６０名が集合しました。我がデザ研・空間計画研（柏）からも７名が参加。まず、ビルの上層階より眺め、都心に浮かぶ水と緑の外濠を確認。周囲を散策しつつ、水辺でボートに乗り込みました。ボートから見る外濠は案外広く、都心だということを忘れました。　ボートを漕いで行くと、奥の”特等席”でのんびり釣りをしているおじさんを発見。外濠は過去の遺産ではありませんでした。

その後キャンパスに戻り、外濠の景観や活用方法について学生が提案。「外濠から目立つ看板広告について、外濠税を義務づけ外濠の利活用に生かす」など興味深い案が飛び出しました。

ポンサン、東京を論ず
ー景観シンポジウムー

M1 北村修一

５月９日、東京農業大学「食と農の博物館」にて、美しい東京を作る都民の会主催「今、東京の景観は！」シンポジウムが行われました。その中で在住外国人によるパネルディスカッションが行われ、中島助教の司会のもと、ポンサンＭ２がコメンテーターとして登場、東京の好きな景観・嫌いな景観を議論しました。好きな景観は、御茶ノ水橋から見る神田川とJR御茶ノ水駅、神田川という落ち着いた水辺と、隣に見える鉄道、奥に見える看板の構成が東京らしいとのことです。一方嫌いな景観は日本橋で、（やはり？）道路元標の真上に首都高速は異様とのことでした。他ドイツ・トルコ・メキシコの方がコメントされ、景観の新たな視点に気づかされたシンポジウムでした。

ポンサンお気に入りの御茶ノ水橋からの眺めは、『季刊まちづくり』に好評連載中「都市空間の構想力」第２回でも取り上げられた（「両岸を分かつ渓谷が地域を束ねる」永瀬Ｄ２、中島Ｄ２）。写真は『季刊まちづくり』より

Borobudur Field School - Indonesia

D1 Le Quynh Chi

During 19th - 26th April, I had a chance to participate in 4th Borobudur Field School (BFS), which is co-organized by Universitas Gadjah Mada, UNESCO-Jakarta, Takada-Kanki Lab-Kyoto University, Wakayama University, Indonesia Heritage Trust, and Jogja Heritage Society. The theme of this BFS is Regional Conservation Planning for Borobudur Cultural Landscape. The field school has drawn attention of people from various fields, including architect, landscape planner, urban and rural designer, geologist, etc.
Borobudur is a ninth century Buddhist Mahayama monument in Central Java. After several centuries hidden under layers of jungle growth and volcanic ash, it was rediscovered in 1814 by Sir Thomas Raffles. Several restorations has been undertaken here, especially the largest one conducted by Indonesia Government and UNESCO from 1975 to 1982. This monument was listed as UNESCO World Heritage Site in 1991. In 2003, Borobudur UNESCO Expert Meeting stated that a study on Borobudur cultural landscape is urgent to be conducted. The Management Paradigm of Borobudur has shifted, especially in term of concept, saying from death monument to space and living. In order to response it, BFS has been held annually.
During 8 days program, the participants experienced 3 main activities, including International Symposium, field survey, and studio work. The area surrounding Borobudur temple has beautiful landscape with terrace field, water fall, fantastic view spot to enjoy large-scale topography, and various traditional villages with both tangible and intangible heritage. However, this area has not been included in tourism development program. Therefore, the task of 4th BFS is to discover the potential of this area and to give proposal for sustainable tourism.
The studio work was divided into 2 groups: one deal with macro level management, and the other with micro one. My group is the second one, focusing on heritage trail program. Our basic idea for sustainable tourism is promotion the interaction between tourist and local people in order to help villagers realizing their potential and tourist adjusting behavior to be polite. By analyzing our impression on trip as tourists with different backgrounds, we proposed several ideas, stress on keeping "normal, daily" things.

新刊紹介「まちづくり学」

西村幸夫[編]／朝倉書店／定価：本体2900円＋税。
　まちづくりの「実践例紹介本」から一歩を進めて、多くの事例に通底する、基本的なまちづくりの姿勢、考え方を、「まちづくり学」としてまとめた。「まちづくり大学院」も開講した今年、「構想」「きっかけづくり」「考え方」「マネージメント」の４章構成・１００ページ余でコンパクトにまとまった本書は、まちづくりを勉強する人にとっての導入書として有用だろう。

マガジン新編集部員紹介　第2回

M1 蛎灰谷 愛

　学外（海外!?）を含めた大勢の方々に読まれていることを自覚しつつ、アットホームで読みやすい紙面を目指したいと思います。よろしくお願いします。

M1 増田 圭輔

　あなたにとってちょうどいい、そんなマガジンでありたいという信念のもとで…。くおりてぃふぉーゆーfromーマガジン編集部員。

編集後記

text_bannai

　桜を見に行った日はやや早すぎて一分咲きで、ツツジを見に出かけた日はすでに薄茶にしぼむ花があちらこちらに混じっていた。盛りのときには見えなくて、盛りでないときにこそ見えるものがある、と人に言われたことがあるけれども、さて、どうなのだろうか。気づけば、空気はもったりと湿気を含んできており、梅雨の匂いがする。間の悪いままに、春は終わってしまった。
　中旬に、金沢を訪れた。伝建地区である「にし茶屋街」の資料館で、二十歳のころにその盛りを迎えて、自分の歳ではすでに廃人となって精神病院に在った作家を知った。寺町から犀川を渡り、犀川から小立野台地へ、小立野から浅野川へ、卯辰山へ、　上りつ下りつしながら、ぼんやりと市街を北上縦断した。斜面の樹々は緑真っ盛りで、眩しさにため息が出た。このまちは、雪に覆われる季節にも、もう一度美しい盛りを迎えるのだろうかな、と想像した。
　私は今号限りで編集部を退きます。編集部員が倍増し、英語版もスタートしたマガジンは、これから正に盛りの季節となってゆくことと信じています。